

道元禪師の佛經觀

青 龍 虎 法

特定所依の經典を持つ教宗は立文字を、特定所依の經典を持たぬ禪宗は不立文字を宗格とし、兩者は全く對蹠的關係に立ち、支那佛教では教宗は禪宗を目して暗證禪と罵り、禪宗は教宗を指して文字の法師と蔑し、久しく相刻の歴史を繰り返して來たが、道元禪師に於てはその立文字をも不立文字をも俱に否定するの態度に出られた。然し禪師の立文字否定の正しき意味は、經典そのもの、否定にあるのではなくして、生命的佛經を概念化し依文解義の對象として固執する不當なる態度を否定せられたのである。従つて不立文字教外別傳の眞義を曲解して佛經をも否定せんとする一派の態度とは自ら異なるものがある。こゝに又佛經肯定の立場をとる禪師と佛經否定の不立文字者流とは對蹠的關係に立つもので、禪師としては當然不立文字者流への鐵鎚が下されなければならぬ。かくて禪師は生命的佛經を建設して、その正しき實踐的把握を提唱せらるゝのであるが、茲に吾人に持たる、深い關心は、由來禪宗の傳統的精神の如く思惟せられたる不立文字教外別傳の否定の眞意、否定に伴つて當然肯定せらるゝ佛經の意義、其佛經の正しき實踐的把握、それ等と禪師の宗教の中心思想たる三昧との關係等の點に存する。以下項を追ふて卑見を述べ様う。

先づ佛經否定から筆を進める。佛經（並に佛敎）否定論者は、禪師の言葉に従へば「祖師の言句なほこゝろにおくべからず、いはんや經敎はながくみるべからず、もちゐるべからず、たゞ身心を枯木死灰のごとくなるべし、破木杓脱底桶のごとくなるべし」（佛經）、「佛經は不中用なり、祖師の門下に別傳の宗旨あり」（全）、「佛經は佛道の本意にあらず祖傳これ本意なり、祖傳に奇特玄妙つたはれり」（全）、「釋迦老漢、かつて一代の敎典を宣説するほかに、さらに上乘一心の法を摩訶迦葉に正傳す、嫡々相承しきたれり、しかあれば敎は赴機の戲論なり、心は理性の眞實なり、この正傳せる一心を敎外別傳といふ、三乘十二分敎の所談にひとしかるべきにあらず」（佛敎）等々と主張して佛經を否定するのであるが、その否定の理由は、祖道と佛經、一心と佛敎との各別論に立ち、祖道は眞實なれど佛經は概念的であり不眞實であると云ふ事に歸する。之に對する禪師の批評は「かくのごとくのともがら、いたづらに外道天魔の流類となれり。もちゐるべからざるをもとめもちゐる、これによりて佛祖の法むなしく狂顛の法となれり、あはれむべしかなしむべし」（佛經）、「佛經もちゐるべからずといはゞ、祖經あらんとき、もちゐるやもちゐるべからずや、祖道に佛經のごとくなる法おほし、用捨いかん、もし佛道のほかに祖道ありといはゞたれか祖道を信ぜん、祖師の祖師とあることは、佛道を正傳するによりてなり。佛道を正傳せざらん祖師、たれか祖師といはん」（全）、「かくのごとくの言句は至愚のはなはだしきなり、狂顛のいふところなり。祖師の正傳にまたく一言半句としても佛經に違せる奇特あらざるなり、佛經と祖道とおなじくこれ釋迦牟尼佛より正傳流布しきたれるのみあり、たゞし祖傳は嫡々相承せるのみなり、しかあれども佛經をいかでかしらざらん、いかでかあきらめざらん。いかでか讀誦せざらん」（全）、「たゞ一心を正傳して佛敎を正傳せずといふは佛法をしらざるなり。佛敎の一心をしらす、一心の佛敎をきか

す、一心のほかは佛教ありといふ、なんぢが一心いまだ一心ならず、佛教のほかは一心ありといふ、なんぢが佛教いまだ佛教ならざらん」。(佛教)等々と其批判は痛烈を極めてゐる。禪師の佛經肯定の立場は祖道と佛經、一心と佛教は一如なりと言ふ處に存する。祖道佛經一如の故に祖道眞實なれば佛經も亦眞實でなければならぬから、佛經を不眞實として否定する不立文字者流の妄談に對して斧鉞が加へらるゝのは當然である。蓋し思ふに禪宗の傳統的精神の如く思惟せられてゐる不立文字の思想は、之を正法の把握に縁遠い經教の概念的理、即ち修道者の陥り易き一面の實踐的弊風を否定したもので、必ずしも經教そのものを否定したものでないといふと理解せらるれば首肯し得らるゝが、若しそれ之を修道者の實踐的弊風を越へて、彼等の對境となる經教をも否定するものとなすならば、それは經教の眞實性の理を辯ぜざる者で、破邪せらるべく充分の條件を具備してゐる。

三

さて然らば、禪師の所謂祖道佛經一如論に立脚せる眞實なる佛經とは如何なる意味のものであるか。一般的理解では、佛經とは佛陀の所説の教法を概念的文字に於て表現せる黃卷赤軸であるとなすのであるが、勿論禪師に於てもそれを佛經となす事に於て何等異りはないが、禪師の特異性を持つ佛經觀は、佛經の意義を最も廣義に解釋して、一切法悉く佛經なりと云ふ謂は、萬有經觀とも稱す可き思想に立つてゐるのである。

禪師は經卷を定義して「いはゆる經卷とは盡十方界これなり、經卷にあらざる時處なし」(佛經)と明確に斷言する。されば時間的には三世、空間的には十方の一切法は悉く經卷そのものである譯であるから、「勝義諦の文字をも

ちる、世俗諦の文字をもちる、あるひは天上の文字をもちる、あるひは人間の文字をもちる、あるひは畜生道の文字をもちる、あるひは修羅道の文字をもちる、あるひは百草の文字をもちる、あるひは萬木の文字をもちる。このゆゑに盡十方界に、森々として羅列せる長短、方圓、青黄赤白、しかしながら經卷の文字なり、經卷の表面なり」(全)とせらるゝのである。是に由つて觀れば、禪師の所謂る經卷が文字通りの黄卷赤軸や單なる概念的表現の經卷でない事は何人にも首肯せられ得る所であるが、然し何故に盡十方界に森森として羅列せる一切法が經卷の文字であるやに就ての論理的意義は尙ほ參究を要するであらう。

茲では先づ「經卷とは盡十方界なり」と言はるゝ盡十方界それ自身の正體を明かにせなくてはならぬ。それが闡明せらるゝ事に依て、一切法が經卷であると云ふ道理が自然に解決して來るであらう。思ふに禪師の謂ふ所の盡十方界は單なる客觀的存在としての十方世界を意味するのではなくして、玄沙の「盡十方世界は一顆明珠」又は長沙の「盡十方界是沙門全身、盡十方界是自己光明」と道破せる體驗的盡十方界であると解すべきである。何となれば禪師の思想は、宗教經驗の最高位に立つ實踐的三昧に依る體驗の内容の開顯に外ならぬからである。さすればその盡十方界の容姿を把握する爲めには體驗の中に生々躍動する盡十方界を觀取せなければならぬ。若しそれ之を體驗より切離して凡眼に映じ凡慮に測度せらるゝ單なる客觀的存在としての盡十方界を經卷と説き實相を談ずるとも、それは無生命の經卷論に成り終るであらう。恰も死人の美容を談ずる事如何に巧妙を極むとも遂に生きたる艷容に接する事能はざるの愚に等しい。體驗中に於ける盡十方界とは長沙の道破するが如く沙門の全身としての盡十方界で、それは沙門即ち坐禪人の三昧王三昧に安住せる端的に「諸法と相ひ冥し、諸時とまどかに通じ」(辨道話)て、三昧人と時空の一切法と

冥合融會し、主客一如、人法不二の超個人的全一的境地に立ち、沙門の外に盡十方界なく、盡十方界の外に沙門なきてふ具體的統一態としての盡十方世界に外ならぬ。禪師は「十方」を拈弄して「拳頭一隻只箇十方なり、赤心一片玲瓏十方なり……おほよそ活鼻孔を十方と參學すべし」(十方)と説かるゝが、かゝる場合の拳頭一隻、赤心一片、活鼻孔は俱に十方融會の三昧の身心、全一的「大佛格を指すもので、従つて十方とは赤心一片を十方とする體驗的のもので、單なる客觀的存在ではない。また「いはゆる正傳しきたれる心といふは一心一切法、一切法一心なり」(即心是佛)と説き、「一切諸法、萬象森羅ともに、たゞこれ一心にして、こめすかねざることなし」(辨道話)と言はるる「一心」は諸法融合の三昧自體の事であつて、その一心が直に山河大地とも日月星辰とも牆壁瓦礫とも表現せらるゝが、それは三昧に冥合せる一切諸法の變相せる概念であり、三昧の又の言葉と解すべきであらう。かく三昧に融合し三昧に縁り起つ一切諸法こそ禪師の體驗的盡十方界であると思ふのである。

三昧の媒介に依り沙門の全身として現成せる體驗的の盡十方界は「彼々ともに一等の同修なり同證なり」(全)の妙境として活現し、「あひたがひに無窮の佛徳そなはり、展轉廣作して、無盡無間斷、不可思議、不可稱量の佛法を遍法界の外内に流通するもの」(全)に外ならぬから、法界に森々として羅列する一切諸法はそのまゝ、悉く經卷とも經卷の文字とも、更にまた實相とも如來とも如來の轉法輪とも言ひ得るのである。東坡居士の悟道の偈「谿聲便是廣長舌、山色豈非清淨身」は、居士自らの體驗的法界觀の道破に外ならぬ。

然るに禪師に於ける一切諸法は單なる自然現象のみでなく、「諸法は如是相なり、如是性なり、如是身なり、如是心なり、如是世界なり、如是雲雨なり、如是行住坐臥なり、如是憂喜動靜なり、如是拄杖拂子なり、如是拈華破顔なり、如是嗣法授記なり、如是參學辨道なり、如是松操竹節なり」(諸法實相)と説かるゝが如く、人事現象(行爲)をも包含するのであるから、三昧に縁り起つ一切諸行も亦佛經祖經と云ふの外はない。「拈華瞬目、微笑破顔、すなはち七佛正傳の古經なり、腰雪斷臂、禮拜得髓、まさしく師資相承の古經なり、つひにすなはち傳法付衣する。これすなはち廣文全卷を付屬せしむる時節至なり、みたび臼をうち、みたび箕の米をひる。經の經を出手せしめ、經の經に正嗣するなり、しかのみならず是什麼物恁麼來、これ教諸佛の千經なり、教菩薩の萬經なり、説似一物即不中、よく八萬蒞をとぎ、十二部をとく、いはんや拳頭脚跟、拄杖拂子、すなはち古經新經なり、有經空經なり、在衆辨道、功夫坐禪、もとより頭正也佛經なり、尾正也佛經なり、菩提葉に經し、虛空面に經す。おほよそ佛祖の一動兩靜、あはせて把定放行おのれづから佛經の卷舒なり」(佛經)とせらるゝ所以である。かくて自然現象並に人事行爲の一切諸法は三昧に縁り起つ事に於て、示眞實相の經卷として現成するのであるから、「その經卷といふは盡十方界、山河大地、草木自他なり。喫飯着衣、造次動容なり」(自證三昧)と要約してもいゝ譯である。かゝる場合三昧を取り失へる凡夫の着衣喫飯、造次動容を認めて以て經卷となすならば、未發菩提心を即佛となす妄想否定(即心是佛)と同一筆法を以て否定せらるべきである。

上來、禪師の佛經に就ての一般的定義と思はるゝ「盡十方界なり」と言ふ事に就て、其具體的意味を明かにし、生命的佛經の意義を解説して來たが、それに依つて三昧と佛經即ち祖道と佛經との一如の道理か知られ、佛經の眞實性

が理解せられた事と思ふ、然るに禪師は他の方面に於て佛經に特殊的解釋を下し、「經卷といふは全自己の經卷なり」(看經)、「この經をすなはち法となづく」(佛經)、「あらゆる佛經は、正法眼藏なり」(全)、「經卷これ法性なり、自己なり」(法性)、「經卷は實相これなり、……しりぬ經卷はこれ如來舍利なり如來全身なり」(如來全身)等と言はれてゐるので、更にそれ等に就ての意義を簡單に明にしておきたい。既述の盡十方界としての佛經は單なる抽象的文字概念としての經卷に非ずして、三昧を荷負ふ具體的生命としての經卷に外ならず、煎じつむれば三昧の今一つの言葉として佛經と説かれたに過ぎないので三昧の外に佛經はないのである。その事は三昧王三昧の卷に結跏趺坐を以て黃卷朱軸とせらるゝを見ても明かであるが、先きに擧ぐる佛經の諸の特殊的解釋を見ても首肯せらるゝのである。さて「全自己の經卷」とは、「盡十方界としての經卷」が法界一相の三昧を客觀的言葉で表現したものであるに對して、主觀的言葉を以て表現した迄であつて、全自己とは法界一相の自己に外ならず、盡十方界の意味と内容に於て異なる所はない。されば今客觀的或は主觀的と云ふ語を使用したか、それは盡十方界或は全自己と云ふ言葉を表面から見た單なる便宜の言ひ表はし方であつて、事實としてかゝる場合の自己は「我儘の拘牽にあら」(看經)ざる主客一如の普遍人としての自己、即ち「盡十方界は自己なり、是自己は盡十方界なり」(光明)と云はるゝ自己であつて、自己も盡十方界も俱に主客の區別は附せられないのである。従つて全自己の經卷も盡十方界の經卷も三昧を背景とする同一意味の經卷に外ならぬ。既に佛經が三昧と同義語であるならば、法界一相の全一的三昧の外に如來も佛陀も存しないから、また全自己の經卷を如來全身と表現しても不思議はない。事實統合的盡十方界の外に如來はあり得ないのである。更に佛經を法とも法性とも正法とも實相とも註釋せられてゐるが、既に云ふが如く統合的盡十方界或は全自己の

活動態が三昧に外ならぬとすればそれがそのまゝ法とも法性とも正法とも實相とも言はるゝのであるから、それ等の諸の言葉で佛經を表現してもいゝ譯である。斯く見來る時、禪師の佛經は抽象的概念的な死物ではなく、三昧自體を荷負ふて躍動してゐる統合的一切諸法に外ならぬ。されば禪師の佛經觀は三昧に立脚せる萬有經觀であると言つてもいゝであらう。三昧に緣り起つ一木一草、一動一靜がそのまゝ佛經であつて、祖道と佛經とは一如不二なるが故に、佛經の否定せらる可き理由は存しないのである。

五

如上は禪師の特異性を持つ萬有經觀に就て述べて來たのであるが、茲に歩を轉じて、一般的に經卷として認められて居る概念的文字の經典に就ての禪師の觀方を參究してゆきたい。この問題は「佛敎」の卷に於ける十二部經に對する禪師の思想を窺ふ事に依つて大體は明かにならう。元來「佛敎」の卷は不立文字敎外別傳の言葉を文字通りに解して佛敎の外に特別に眞實なる上乘一心の存するが如く思惟する心敎差別の思想に對して心敎一如論を提唱して、その蒙を啓く事が中心となつてゐる。心敎一如論の論理的考察は他の機會に譲り、茲に結論的に言へば、佛敎は一心—三昧—の表現であり、一心そのものであつて、一心の外に佛敎なく、佛敎の外に一心なしと言ふことに歸するが、此の立場から禪師は「上乘一心といふは三乘十二分敎これなり。大藏小藏これより」(佛敎)と説き、「佛正法眼藏を單傳する佛祖いかでか佛敎を單傳せざらん」(全)とも敎えられてゐる。既に三昧たる一心の表現にして、佛祖の單傳する佛敎である限り、それは、當然佛祖の生命の躍動する生命的なものでなくてはならぬ。それ故に「この十二のおお

の經と稱す、十二分教ともいひ、十二部經ともいふなり、……これみな佛祖の眼睛なり、佛祖の骨髓なり、佛祖の家業なり。佛祖の光明なり、佛祖の莊嚴なり、佛祖の國土なり」(全)と提唱せらるゝ。茲に到つてか佛祖の生命なる立場からは、法界に森々と羅列せる經卷も、また文字に表現せる黃卷赤軸も何等異なる所はないのである。

之を思ふに禪師の佛經肯定觀は祖道佛經一如、心教不二の思想に立脚し、不立文字の固執より來る心教差別論の誤謬に痛撃を加へ、概念的文字の經典は勿論言ふ迄もなく、更に盡十方界一切諸法の經卷をも悉く生命の躍動する眞實經と認める所にある。特にその萬有經觀の思想の如きは、他の諸法實相、悉有佛性の思想と同一線上に立つ同一思想で、凡て三昧の實踐に基く體驗そのもの、開顯に外ならぬ。

六

さて然らばかゝる生命的佛經は如何にして把握し體得すべきであるか。茲に實踐論の立場から、禪師の看經、念經轉經等に對する觀方に觸れてゆきたい。既に佛經を肯定する限り看經念經等を否定すべき理由がないのみならず、かへつて禪師の宗教に於ける實踐的修證には、禪師自ら「阿耨多羅三藐三菩提の修證、あるひは知識をもちゐ、あるひは經卷をもちゐる」(看經)と言ひ、或は「發意も經卷知識により、修行も經卷知識による。證果も經卷知識の一親なり」(佛經)と言はるゝが如く或從知識、或從經卷を必須條件としてゐるのである。加之、佛經を體得せざる者は佛祖の兒孫に非らずと迄極言せられてゐる、曰く「おほよそしるべし三乘十二分教等は佛祖の眼睛なり、これを開眼せざらんもの、いかでか佛祖の兒孫ならん。これを拈來せざるもの、いかでか佛祖の正眼を單傳せん」と。斯様な次

第で、佛經を體得すべき實踐方法としての看經念經等は必然的に許容せらるゝのであるが、然しそれも一概に論斷し去る譯にはゆかぬ。所以如何となれば、禪師は時として看經を否定し去つてゐるし、特に「佛經」の卷に於てはかの有名な天童淨祖の語「不用燒香禮拜念佛修懺看經、祇管打坐辨道工夫身心脫落」を引用して、更に「かくのごとくの道取あきらむるともがらまれなり。ゆえはいかん看經をよんで看經とすれば觸す、よんで看經とせざればそむく」と附言せられ、看經の肯否何れも罪ありとせられてゐるからである。蓋し看經を看經として肯否する事俱に理に背むくとは如何なる意味であらうか。そは思ふに看經者の態度方法の如何に存するもので、看經眼を具せざる者の看經を看經とすれば觸し、看經眼を具する者の看經を看經とせざればそむく事となるの意であらう。その事は禪師も前文に續いて「看經須具看經眼」の古語を引用せられて居るのを見ても察せらるゝ。斯くて一概に看經が肯定せらるゝとは限らないのであるが、看經眼を具する者の看經が許容せらるゝ事は勿論で、禪師も具眼の看經を力説勸説されるのである。

さて看經眼を具する者の看經、それを禪師は「おほよそ看經は、盡佛祖を把拈しあつめて、眼睛として看經するなり、正當恁麼時たちまちに佛祖作佛して說法し、説佛し佛作するなり、この看經の時節にあらざれば佛祖の頂額面目いまだあらざるなり」(看經)と説いてゐる。こゝでは看經の眼睛が注目し價する、所謂の看經の眼睛は盡佛祖を把拈し集めて眼睛とすることであるが、この眼睛に就て「參註」は「其眼睛者、把拈聚集盡佛盡祖、圓成活碎故、忽然三昧兀兀地也」と巧妙な註を下して居る。是に由つて觀れば盡佛祖を把拈して眼睛とすると言ふ事は、畢竟じて三昧王三昧に安住する事に外ならぬ。蓋しそれは佛祖自體が王三昧の結晶そのものであるからである。さて然らば能看

の眼睛が三昧であり、所看の佛經も亦既述の如く三昧に外ならぬとすれば、それは結局三昧が三昧を看る事であつて看ると言ふから能所が立つのであるが、事實は三昧安住の端的に盡十方界の佛經を看破し讀破し法界一相の境地に立つので、こゝに看經は成立してゐるのである。されば禪師の所謂看經は禪師の宗教思想の中樞たる三昧に歸するものとせなければならぬ。

七

看經が三昧である事は略明瞭となつたと云へ、果してその内容が三昧と相一致するものなりや否やに就ては尙ほ説明を要する。そこでそれを明かにする爲めに更に看經の同義語たる念經、轉經の實際を検討して見様う。禪師の言ふ所の念經の内容は、「この念經僧の念は有念無念等にあらず、有無俱不計なり、たゞそれ從劫至劫手不釋卷、從晝至夜無不念時なるのみなり、從經至經無不經なるのみなり」(看經)の言葉に盡きてゐる。こゝに念經の念に關して最初は「有念無念等にあらず有無俱不計なり」と説いて有無兩念を否定し、次には「從晝至夜無不念時なるのみなり」と説いて、念を肯定してゐるが、之を簡単な言葉で表現すれば、高次の意味に於ける「不念而念」の意義となり、之は正しく三昧の内容を物語るものである。「不念而念」と同一意味を現はす語に、宏智古佛の坐禪箴に「不觸事而知、不對緣而照」があり、道元禪師のそれに「不思議而現、不回互而成」がある。さて高次の意味に於ける不念は、二乗の無心とは區別せらる可きもので、凡夫の有念、二乗の無念を否定せる上に立ち、主客の對立を泯絶して臆がては主客合一の世界を荷負ふべき立場にある真空の心境に外ならぬ。然り而して高次の意味に於ける念は凡夫の相對的有念

の念と區別せらる可きもので、既に主客の對立を泯絶せる眞空の心境を通過し來たり、主客圓融して現成せる法界一相の絶對的心境即ち妙有の世界を意味するものである。(佛教第二卷第六號の拙稿「禪學の中心思想」参照) この高次の念は能念所念に渉る相對的念を越えたる全一的の一念であつて、「一切諸法、萬象森羅ともに、たゞこれ一心」の一心に相當する。更に言葉を換へて云へば、「無不經」と同一意味で、「無不經」は「盡十方界ならざるなし」の意、兀々地に於ける、「諸法とあひ冥し、諸時とまどかに通じ」たる全自己の境界に外ならぬ。かく念經を内容的に見ると亦三昧の外の何物でもない事を知るのである。

更に今一つ轉經に就て參究して見る。その實例として有名な般若多羅尊者の常轉如是經を擧げ様う。尊者の所謂「出息不隨衆緣、入息不居蘊界、常轉如是經、百千萬億卷」の句は禪師に依つて「看經」並に「佛經」の兩卷に引用せらるゝ、茲に於ける「不隨衆緣、不居蘊界」は文字通りに解釋すれば、客觀にも主觀にも心を留めない事で、金剛經の應無所住の心構へ、畢り主客對立を泯絶せる心境を物語るものであるが、禪師の如く「不隨」を「渾隨」(看經)と解釋すれば、それは心境の一步進みたる主客圓融の境地を意味する事となるので、念經で言へば「無不念時」、金剛經で言へば「而生其心」と同一境界と見ていゝであらうし、亦「常轉如是經」も同義に歸するのである。不隨の解釋に消極積極の相違はありとするも、俱に三昧の内容の如實の姿を物語るものである事に何等變りはない。従つて之を行動的に言へば不隨不居の三昧人の一動一靜はそのまゝ、常轉如是經そのものである。かくて轉經も亦三昧の今一つの言葉に外ならなかつたのである。

上來二項に涉つて生命的佛經把握の實踐行に參じ來つて、茲に大凡三つの結論を得た。その一は生命的佛經を把握

するには三昧を荷負ふ實踐行でなくてはならぬ事。その二は禪師の所謂佛經把握の實踐行たる看經、念經等は常識的に考へらるゝそれ等とは雲泥の相違を持ち、生命的三昧と異語同義であつた事、その三は禪門内の一派からは破邪せらる可き看經念經等を、禪師はその中心の實踐行三昧を以て巧妙に統一してゐる事これである。

八

上來禪師の佛經觀の二三の問題に觸れて來たのであるが、何れの點から見ても、禪師の宗教思想の中心たる三昧から離れてゐるものは一もなかつた。否や離れてゐないと云ふよりは寧ろその總てが三昧の内容を持つ種々相であつてその種々相たる佛經、看經、念經等の内容から見れば三昧そのものであつたと言つていゝのである。之れ蓋し三昧中心主義に立つ禪師の思想の當然の歸結に外ならぬ。言ふ迄もなく禪師の思想、特に果上の法門は實踐的三昧に於ける體驗の開顯に外ならぬが、その思想の表現形式に於ては種々異なる概念を主題とし、その概念の持つ思想に對する教界の誤謬曲解を訂正しつゝ、體驗せる三昧の内容に統一せんとする態度をとつてゐる。佛經觀もその一面の現はれである。